■パネルディスカッション

「地域の仲間づくりを 交通安全にどう生かすか」

第二部では「地域の仲間づくりを交通安全にどう生かすか」をテーマにパネルディスカッションが行われ、鈴木春男・千葉大学名誉教授がコーディネーターを務めた。パネリストは石井隆之・警察庁交通局長、福祉ジャーナリストの村田幸子さん、女優の東ちづるさん、熊本県八代地区交通安全協会交通安全講習員の賀久久美子さん、中澤見山・㈶全日本交通安全協会専務理事の五人が務め、それぞれの立場から意見を発表した。

石井隆之・警察庁交通局長は「近年、交通事故の被害が減少に転ずる成果を挙げることができたのは、交通安全対策を総合的に関係行政機関や民間団体・事業者等と協力して進め、交通ルール遵守について国民の理解と協力を得たことが何より大きかったと考えている。そのための普及啓発活動等については、官民が一体となってうまく役割分担と相互協力を図ってきた。㈶全日本交通安全協会は半世紀にわたり、民間の国民運動の中核として全国的な交通安全対策に取り組むなど、交通事故の減少に大きな貢献をしていただき、感謝している。安全で快適な交通社会の実現という国民全ての願いを実現するためにも、今後ともご活躍をお願いしたい」と、これまで㈶全日本交通安全協会の果たしてきた役割について振り返るとともに、今後の更なる活動の推進と協力を要請した。

石井隆之・警察庁交通局長

NHK解説委員として二十年近く高齢者等の問題に取り組んできた村田幸子さんは「お年寄りや認知症の方々をどう支えていくかは、交通社会においても大きな課題。運転の制限等も大切だが、過疎地域では買い物代行といった利便性の面でのフォローに加え、望めば自身で出かけて買い物を楽しむことができるようにするなど、その方の自尊心や生活の質を尊重することにも目を向けたい。お年寄りや認知症の方々が自ら免許証を返納する気持ちになるような環境を作り、啓蒙していくことが望ましい」と提唱した。

福祉ジャーナリストの村田幸子さん

プライベートで様々なボランティア活動を続けている東ちづるさんは「以前、取材で交通刑務所の受刑者のお話を伺い、こうした『交通事故加害者』を作らぬためには、家族や友人、職場の仲間など周囲の方々の協力が重要であると感じた。また、今日は賀久久美子さんのお話を伺い、人の心を動かす交通安全教育を行うためには、誠実さや真摯であることがいかに大切であるかを再認識した」と話した。

女優の東ちづるさん

巧みな腹話術や、工夫を凝らした自作の教材を駆使して、三十余年にわたり交通安全指導を行っている賀久久美子さんは「幼児からお年寄りまで、幅広い年齢層を対象に交通安全指導を行っているが、『対象者に合わせた教材』『理解しやすい説明』『注意を引きつける話術等の工夫』に留意しながら、受講者の方々が交通事故に遭わないための知識を身に付け、実践できるようにサポートしていきたい。今後とも、受講した方々が共感し、充実感を覚え、何度でも参加したくなるような素晴らしい交通安全指導を目指したい」と語った。

熊本県八代地区交通安全協会交通安全講習員の賀久久美子さん

中澤見山・㈶全日本交通安全協会専務理事は「協会が歩んだ五十年を振り返ると、今日の交通安全事業の多くが、『交通戦争』の非常事態を抑えたいとの情熱が出発点となっている。交通事故死者が五千人を下回るなど、交通事故の被害が現況にまで減少した成果は誰かが独り占めできるという性質のものではないが、㈶全日本交通安全協会が皆様とともに永年にわたり交通安全思想の普及に情熱を傾け、地道な活動を積み重ねてきたこともあずかって大きな力となったことを誇らせていただきた

鈴木春男・千葉大学名誉教授

中澤見山・㈶全日本交通安全協会専務理事

い。私たちは、これからも手を緩めることなく交通安全思想の普及に取り組んでいく」と、今後も㈶全日本交通安全協会が、協会設立の趣旨に沿い、交通安全活動を推進していく決意を表明した。

最後に鈴木春男・千葉大学名誉教授が「様々な意見が積極的に発表され、非常に意義深いディスカッションとなった。日本ではボランティア活動とは『社会奉仕』であり、活動を行う側にとっては、いわば『支出』であると捉えられがちである。しかし、これは活動を行った人自身に最も利益をもたらすものであり、今後はさらに多くの方々に、交通安全等に向けたボランティア活動に参加していただきたいと考えている。ボランティア活動や仲間づくりを楽しみながら、それを安全で快適な交通社会の実現につなげていくことが理想ではないだろうか。

本日お集まりいただいた会場の皆様にも、それぞれの立場から、地域の仲間に対し、さらに交通安全を動機づけるよう働きかけていただきたい」と締め括った。